



125 年生国光の結実
No. 108
2025. 6. 25

【おとうと「ジュノハート」】

適期収穫・目揃い研修会

県南会場は、6月17日に五戸会場（県南果樹部）、名川会場（蹴場福男氏園）、南部会場（留目秀樹氏園）の3か所（出席者119名）、津軽会場は6月19日に当研究所（出席者40名）で開催しました。いずれの会場も西館研究管理員が令和7年産の適期収穫について説明しました。



カラーチャートの利用方法を説明する西館研究管理員

収穫は、満開後日数を目安として、「ジュノハート」専用カラーチャートを利用し判定します。

①「満開55日後頃」を収穫始めとし、着色指数「5」以上の果実を収穫する。

②「満開60日後頃」（収穫最盛期）以降は、指数「4」以上の果実を収穫する。

③指数「6」に達した果実は過熟で日持ちが著しく劣り、流通には不向きなので規格外として即売用等に向ける（図1）。なお、果皮色を判定する際は、着色が中庸な部分で行い、直射日光を避けて明るい日陰で比色する。

特に令和5年産や令和6年産

では、収穫期の高温により果実の着色が遅れ、糖度は上がっているが、着色の出荷基準を満たさないものが多く、着色を待つことで過熟果やウルミ果の発生が見られ、収穫適期を逃すことがあったことから、当面の対策として、高温障害の出やすい樹・部位から優先的に収穫すること。また、連棟ハウスでは谷部分のビニール等をまくり上げ、換気をすること（防鳥対策必須）を強調しました。

【りんごの新梢長穂接ぎ】

この高接ぎ技術は6月から7月でも可能なので、雪害で失った成り枝の回復などに活用できます。手順は次のとおりです。

- ①実施時期は6月下旬から7月上旬が最適
- ②穂木は健全で充実した新梢を使う。
- ③葉柄に葉を少し残して切り、木質化した部分を使う。
- ④穂木をくさび形に削る。皮部に接する側は長めに削る。
- ⑤接ぎ木する箇所を「コの字」か「T字」に切皮する。
- ⑥木質部と樹皮の間に穂木が止まるまで差し込む。
- ⑦隙間を癒合剤で埋め、接ぎ木テープ等で固定する。

作業手順は、青森県産業技術センターの Youtube 公式チャンネルに掲載しています。



QRコード: (株)デンソーウェブの登録商標

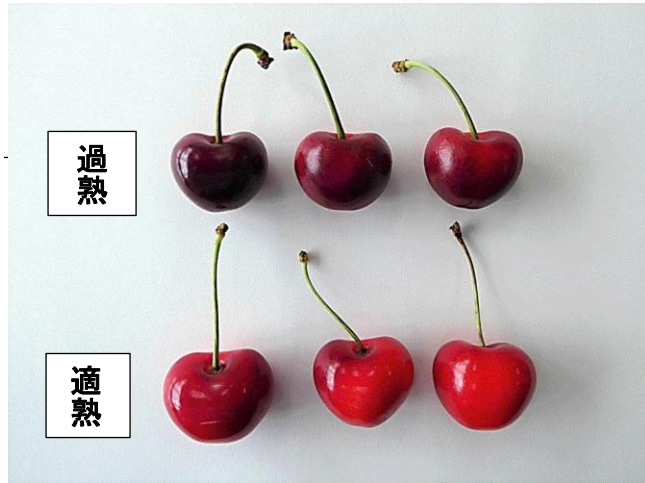


図1 「ジュノハート」過熟果
（上段：過熟、指数6
下段：適熟、指数4～5）

【摘果】

6月18日、恒例の全職員による摘果デーを猛暑の中、開催しました。

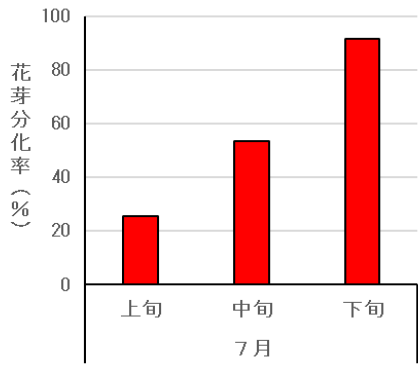


図1 「ふじ」の時期別花芽分化率 (1984~1986年、りんご試)

さて、ご存じのとおり間もなく、りんごの花芽が作られる時期になります。「ふじ」の花芽分化率が50%を越える時期は7月中旬となっています(図1)。

「ふじ」の開花率(全県)は、「ふじ」の花芽分化が起こる7~8月の平均気温が高いほど翌年の開花率が低くなる傾向があります(図2)。

また、7月に12℃(夜温)~20℃(昼温)、17℃~25℃及び22℃~30℃の3区の治療をした試験では高温区ほど花芽分化率が低い結果となっています(図表省略)。

これらは、夏季の気温が高いほど、花芽の形成が抑制されることを示しています。

摘果強度と花芽形成の関係をみると摘果強度が強いほど(4頂芽に1果、5頂芽に1果)翌年の花芽率が高まります(図3)。

気象の影響を最小限にし、毎年安定した収量を得るためには、基本技術の励行が必要です。具体的には、樹冠内部まで光が届く枝の配置とすること、早期に適正な着果量とすること、必要以上に樹勢を強くしないことなどがあげられます。自園の状況を振り返り、基本的な対策を日頃から実施するよう心がけて下さい。

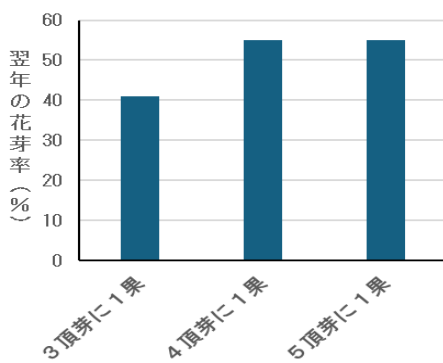


図3 「ふじ」の摘果強度と花芽形成 (1986年、りんご試)

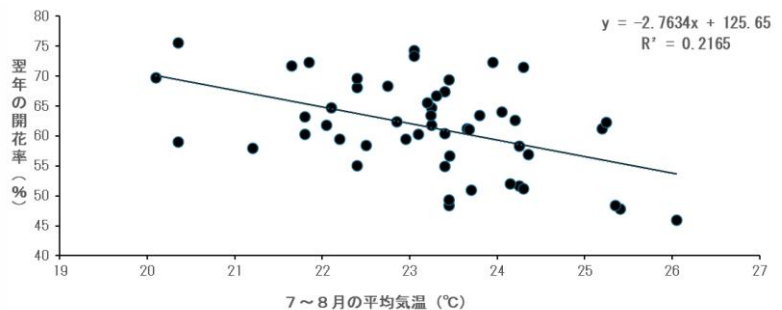


図2 7~8月の気温と翌年の「ふじ」開花率

注) 気温: 1970~2024年(2008、2009年を除く)の51年、りんご研究所観測。開花率: 1971~2025年(2008、2009年を除く)の51年、県全体、県りんご果樹課調べ。

編集後記

ブラジル連邦共和国、サンタ・カタリーナ州政府ご一行が来所されるとのことだったので、良い記事になると思っていたところ中止となりました。同州について、知らない方もいると思いますので、簡単に紹介します。

同州との交流は、りんごが取り持つ縁で始まり、昭和55年10月23日に青森県と友好協定を締結しました。

その始まりとは、昭和46年、後沢憲志氏(元苹果試験場栽培科長、後に長野県果樹試験場長)がりんごの栽培適地かどうかを検証した上で栽培技術などの指導をしたことで、以降、福島住雄氏(元場長)をはじめ数名の当所(試験場)の研究員が国際協力事業団を通じて派遣され、サンジョアキン試験場等に滞在しながら行っていました。また、研修生が当所に派遣されてもいます。現在、同州はりんごの一大産地となっています。(F)